

『明治28年』130周年記念

第71回特別企画展

子規の『明治二十八年』

―激動の一年―

令和7年 8月2日(土)～9月23日(火・祝)

休館日 8月5日(火)・19日(火)・26日(火)、9月2日(火)・9日(火)・16日(火)

開館時間 午前9時～午後6時(展示室入場は午後5時30分まで)

会場 松山市立子規記念博物館 3階特別展示室

観覧料 個人 500円 団体 400円 65歳以上 250円 高校生以下 無料

《記念講演》

演題：「人生の挫折と俳句の革命―明治28年前後の正岡子規の偉業について―」

講師：青木 亮人氏(愛媛大学教育学部教授)

日時：9月14日(日) 午後2時～3時30分

会場：1階視聴覚室 ※聴講無料

《総館長の関連講座》

演題：「子規・『海南新聞』9月1日の俳句革新」

講師：竹田 美喜(松山市立子規記念博物館総館長)

日時：8月24日(日) 午後2時～3時30分

会場：1階視聴覚室 ※聴講無料

《ギャラリートーク》

日時：8月9日(土)、9月20日(土) ※ともに午前10時から50分程度

会場：3階特別展示室 ※聴講には観覧券が必要

松山市立子規記念博物館

Tel 089-931-5566 〒790-0857 松山市道後公園 1-30 <https://shiki-museum.com>

『明治28年』130周年記念 第71回特別企画展 子規の『明治二十八年』-激動の一年-

一八九五（明治二十八）年は、子規が従来の文学活動を大成して過去と決別し、命の危機を乗り越えて俳句革新に乗り出した年です。

明治二十八年一月、子規の日清戦争従軍が内定します。命がけの従軍を覚悟し、俳人としての前半生を大成した「なじみ集」を遺して東京を出立した子規は、四月十日、広島から中国・遼東半島の戦場へ渡航しました。戦地では軍医・森鷗外と親交を深める一方、不衛生な環境に病状を悪化させて帰国の船中で大咯血、五月二十三日に神戸病院に入院します。危篤状態に陥りましたが、高浜虚子と河東碧梧桐、母・八重らの看病で奇跡的に回復し、七月二十三日に須磨保養院に移りました。再生の喜びを噛みしめ、俳諧研究を再開させた子規は、「余命をかけて文学史に正岡の名を残そう」（子規漢詩「正岡行」）と強く決意します。

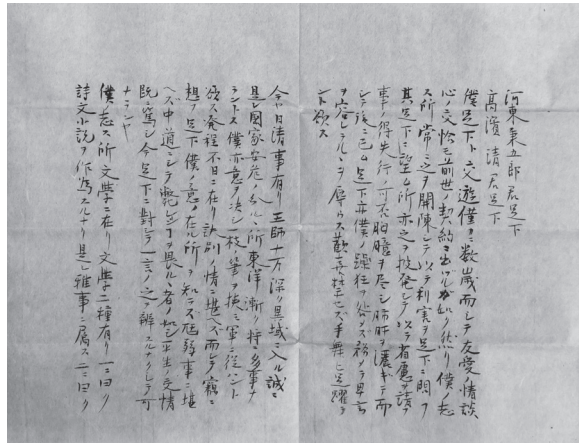
八月二十五日、俳句革新の覚悟を胸に子規は松山に帰ってきます。松山では愛媛県尋常中学校教員として赴任中の親友・夏目漱石が待っていました。子規は漱石の下宿「愚陀佛庵」に五十二日間寄寓し、ここで俳句結社「松風会」の俳人を指導します。九月一日からは柳原極堂とともに旧派主導だった『海南新聞』の俳句欄刷新に着手し、さらに松山に新派俳句を根付かせるべく、松風会会員に向けて畢生の俳論「俳諧大要」を執筆し、『日本』と『海南新聞』に連載しました。こうした松山での俳句革新を、「日本の文学を興そう」との志を共有する漱石の友情が後押ししました。十月十九日、子規は松山を立ち、奈良を旅して「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の俳句を詠み、同月三十一日、東京・根岸の子規庵に帰着します。

約八か月ぶりに帰京した子規は、自らの余命の短さを自覚し、十二月上旬、高浜虚子に文学事業の後継者となるよう依頼しますが断られました（道灌山事件）。この時子規は覚悟を決め、たとえ一人でも文学事業をやり抜く決心をします。この年子規が蒔いた俳句革新の種は、翌明治二十九年以降、高浜虚子・河東碧梧桐の成長と日本派の台頭、子規庵句会の定着、明治三十年一月の俳誌『ほととぎす』創刊など、豊かに実を結びました。

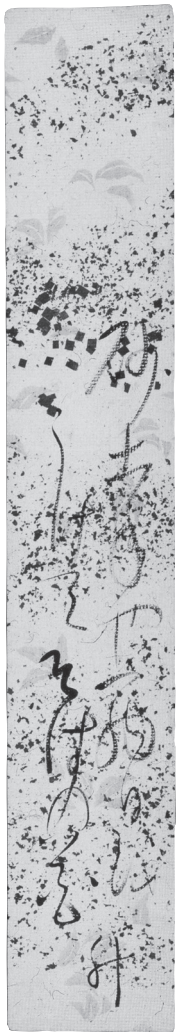
今回の特別企画展では、『明治二十八年』一三〇周年を記念し、国内外を忙しく飛び回りながら、前半生を大成した後半生を踏み出す決意を固めた子規の激動の一年を振り返り、命がけで取り組んだ俳句革新やそれを支えた仲間との絆を新たな視点から問い直します。



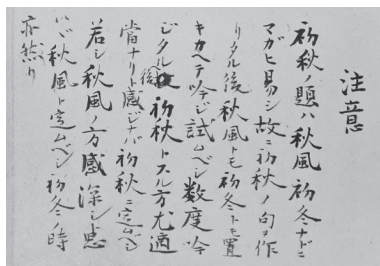
愚陀佛庵外観



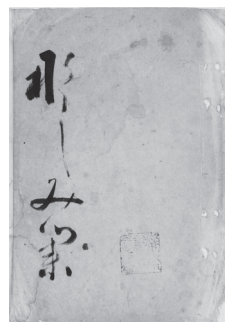
子規の河東碧梧桐・高浜虚子あて書簡（明治28年2月25日）〔虚子記念文学館所蔵〕



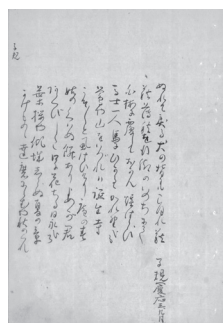
子規句「砂土手や西日をうけてそはの花」



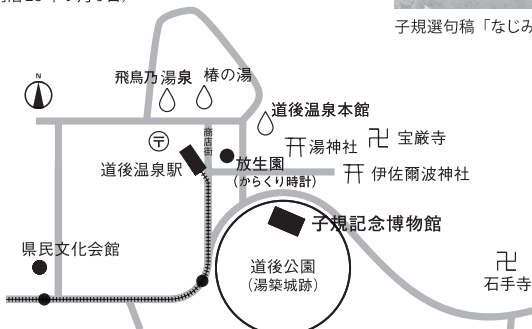
子規筆「松風会九月会稿抜萃三十章」
（明治28年9月6日）



子規選句稿「なじみ集」



従軍直前の子規（明治28年3月30日）



道後温泉駅より徒歩約5分／道後公園駅より徒歩約5分 ※公共の交通機関をなるべくご利用ください

松山市立子規記念博物館

〒790-0857 松山市道後公園 1-30 TEL: 089-931-5566
<https://shiki-museum.com>

